

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.12
2011年3月16日発行
鶴見大学文化財学会

文化財学科の学生を経て思うこと

星野玲子

私は鶴見大学文化財学科に入学し、大学院へ進学し、2010年に長い学生生活に終止符を打ち、現在に至ります。大学院生であると同時に、実習助手として務めていましたので、4月から常勤として働き始めたとはいえ、学部生の皆さんとも面識があるわけです。教員の中で唯一、文化財学科の授業を受けたことがあるのです。ですから、毎週のように課せられるレポートの苦しみも、授業の面白さも身をもって体験してきました。今、改めて学部生時代の事を思い出すと、学問に積極的に取り組んでいたとはいえません（先生方ごめんください）。熱心に部活動にも取り組みました。今でも苦楽を共にした仲間は深い絆で結ばれているように思います。そのため、部活と学問の両立に悩む気持ちもよくわかります。様々な業種のアルバイトもし、社会人として働いてお金を稼ぎ、仕事をやり遂げるといふこともしました。アルバイトの経験は、今に活かされている所も沢山あります。

規律を重んじる学校で、部活動では精神的にも肉体的にも極限まで自分を追い込んで、厳しく鍛え上げられた3年間の高校生活を終え、大学生になったばかりの時は、なんて自由なのだろうと思いました。大学生は、授業以外でも勉強をしたり、アルバイトや部活をしたり、遊びに行ったり、趣味の時間を充実させたり、ある程度自分で好きなように行動できました。しかし大学生を送るうちに、自由とは何をしてもいいのではなく、全ての言動に自分自身が責任を持つことなのだと感じるようになりました。今自分が何をすべきなのか、長期的に見た時

これから何をしておくべきなのか、その場その場での瞬時の対応を自分で判断し、その責任は自分が持たなくてはならないのです。誰かのせいにすることは通用しないのです。それが大人であり、社会人への一歩なのでしょう。そんなことも頭の片隅において、文化財学科の学生である以上、レポートや授業の準備など、やるべきことをまずやりましょう。その一方で、遊びやアルバイトなど、大いに楽しい時間も過ごしてください。今しかできないことも沢山あるからです。また、この先学問・人生の壁にぶち当たったこともあるでしょう。その時はご家族だけでなく、先生方、助手さん、同じ学生生活を送っている周りの学生さんの助けを借りていいと思います。私の学生時代も、そして今も、日々試行錯誤の連続です。深く悩み苦しむ時期もありますが、アドバイスを下さる先生方や助手さん、仲間や友人知人、気さくに声をかけてくれる学生さんたちのお陰で、こうして日々過ごしています。

そして、文化財学科は他の大学では経験することができないカリキュラムが多く、鶴見大学でしか教わることができない「文化財学」を学ぶことができます。また、この文化財学会に於ける春・秋の講演は、普段なかなか聞くことができない貴重で最先端の研究ばかりです。そうしてみると、皆さんは学問の面において恵まれた環境にいます。また、文化財は多方面にわたり沢山のものがあります。文化財学を学ぶ中で、これ！という何かを見つけると、また興味の幅も世界も広がると思います。

文化財学会 春季大会・秋季シンポ関連報告

〈春季大会〉

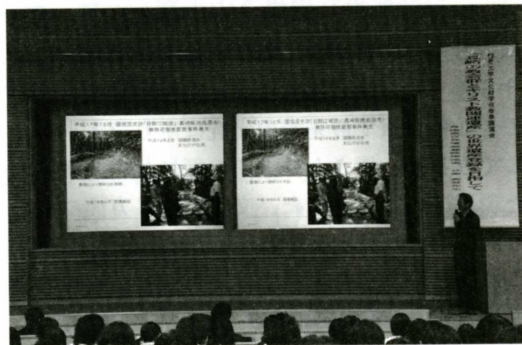
『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』 の世界遺産登録を目指して』

報告 3年 守屋 琴美
2年 水落 絢香

平成22年度春季大会は、去る6月5日土曜日に行なわれ、長崎県知事公室世界遺産登録推進室課長補佐の日高真吾先生に『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の世界遺産登録を目指して』と題して、ご講演いただきました。

現在、長崎県では29の資産を1つにまとめ、講演題名にある『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』の世界遺産登録を目指しています。それら教会建築の特徴は、250年もの長期にわたる潜伏から奇跡の復活を果たした独自の歴史を背景とし、ひそかに信仰を守りながら生業を営む集落と一体化した立地であること、さらに平戸・長崎・五島などの広範な地域に建設されたことです。また、中江ノ島信徒発見の舞台となった大浦天主堂や信仰の歴史を物語る斬首の地などが聖地として遺産に加えられています。これら長崎県内各地に存在する文化財は、ヨーロッパと異なる独自のキリスト教文化の形成を示す文化遺産です。

日高先生は長崎のキリスト教史に「伝来、繁栄、弾圧・潜伏、復活」の4段階があることを示されました。伝来は、1549年のザビエルが種子島で布教活動を開始し、1550年には平戸へと教線が拡大します。繁栄は、1570年の長崎開港を契機としたイエズス会



の設立に示されます。この時期に現在の日野江城跡、サントドミンゴ教会跡、二十六聖人跡・原城跡、大浦天主堂などが建立され、西欧の文化や品々が長崎にもたらされます。弾圧・潜伏は1614年江戸幕府の禁教令に始まり、1637年島原の乱へと展開するものの、弾圧時も信者は信仰を守り続けました。やがて1865年3月に大浦天主堂において信徒が発見され、長崎のキリスト教は復活に至ります。

こうした文化遺産を持つ長崎県の人口は平成17年をピークに減少傾向にあり、中でも五島列島などの離島の年間減少数は約13万人です。加えてカトリック信者の多い韓国からの巡礼者も減少しています。

世界遺産登録の後、観光客が3～4倍に増加した石見銀山、人口増加率が従来の2倍になった白川郷や屋久島の例を受け、長崎県はキリスト教関連文化遺産の世界遺産登録を通して、地域振興や地域再生と文化資産の保護・保存の共存を目指していると、日高先生は述べられました。

『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』は、平成19年に世界遺産暫定リストに入り、長崎県は平成22年4月に世界遺産登録推進本部を設置して県内5市2町と協力して地域住民との意見交換会なども行いながら登録に向けた作業を進めています。

また、地域住民の取り組みでは、平成13年9月に『長崎の教会群を世界遺産にする会』、平成19年4月にNPO法人認可を受けた『世界遺産チャートラスト』が設立され、そして平成20年8月に、長崎の歴史・品格を守るためのガイドの育成などを行う『長崎巡礼センター』が発足し、活動しています。

人口が減少している長崎、特に離島では、資産が散在しているのが現状です。今後、世界遺産登録と長崎の教会群保存を多くの方に応援していただきたいと、先生は締めくくられました。

〈秋季シンポジウム〉
「近世日本におけるプルシアンブルー
の受容」

報告 2年 水落 絢香
1年 鎌倉 洋

平成22年度秋季シンポジウムは、11月6日土曜日に「近世日本におけるプルシアンブルーの受容」と題して次のような内容で開催されました。

- ・神戸市立博物館学芸員勝盛典子先生「プルシアンブルーの江戸時代における受容の実態について」
- ・東京藝術大学大学院保存修復日本画研究室准教授荒井経先生「画家の視点・プルシアンブルーによる連作を通して」
- ・秋田市立千秋美術館学芸員松尾ゆか先生「秋田蘭画の絵画表現」
- ・本学文学部教授石田千尋「江戸時代の紺青輸入—オランダ船の舶載品を中心として」

化学合成された青色顔料プルシアンブルーは、蘭名をベルレイスブラウといい、近世日本では紺青と訳されました。近年、文献資料、絵画、保存科学など多方面から調査・研究されています。今回は、江戸時代におけるプルシアンブルーの受容に焦点を絞り、多角的視点からの研究報告をお願いしました。

勝盛先生は、基調報告として化学分析を伴う調査結果を通して、近世日本におけるプルシアンブルーの受容について報告され、平賀源内から秋田蘭画に繋がったプルシアンブルーは多彩な表現をするも、技術を知らない画家には膠水に溶けない絵具とされ、使用には口授が必要であったと述べられました。他方、油彩画用絵具の知識がすでに存在したことは、長崎の画家若杉五十八や江戸の洋風画家司馬江漢などによる油彩画作品からも実証でき、今後は浮世絵版画のプルシアンブルーの汎用と輸入量増大の関係、中国での製造、未把握の国内流通が課題として残さ



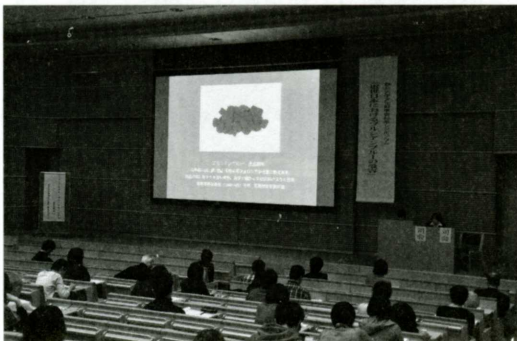
れており、作品研究と化学分析の検証が必要だとされました。

荒井先生は2005年から自らプルシアンブルーを主体とした作品を製作されている経験をもとに、プルシアンブルーは少量でも水色に発色するが、着色力が強いいため、厚塗りではひび割れをおこし、改良には日本画に適した粒子化への調整が必要だったと述べられました。また、近代になって、胡粉と合わせた“具”という顔料ができ、合成顔料の輸入や開発によって利用が拡大したと述べられました。今後は、文献調査、科学分析、光学調査と合わせて商品目録、材料感覚の探求が必要であるが、製造現場からたどると理解しやすいとされました。

松尾先生は、勝盛典子氏、東京文化財研究所の朽津信明氏と共同で行った、顔料の化学分析、粒子の観察調査等に基づき、プルシアンブルーによる彩色表現を中心に、秋田蘭画の絵画表現について報告されました。プルシアンブルーから作られる色は青、緑、紫と幅広く、佐竹曙山や小野田直武には手放せない色でした。絵具は膠どき、裏彩色等を工夫すると、多様な色彩や表情を生み出します。しかし、微量の彩色材料で行なった背景の青等、元素やスペクトルが確認しにくい部分の分析、染料系絵具の分析については、今後検討する必要があるとされました。

最後に石田先生は、プルシアンブルーについてオランダと日本側の貿易史料を用いて調査・分析し、18～19世紀の輸入実態について述べられました。プルシアンブルーは、宝暦2年(1752)より「日本人への手当」もしくは「日常生活用」のために輸入され、たとえ出島内であったとしても、翌3年(1753)以降より使用され、日本人の目にふれていたことは間違いないだろうとされました。

討論は本学教授の加藤寛先生を司会として行われたが、時間的制約もあり、各発表者による補足説明を中心として行われました。



実習の感想

実習Ⅳ（国内）旅行記

岩橋 春樹

今年の実習Ⅳ（国内）は北海道を巡った。日高方面→釧路・根室方面→斜里・網走方面→旭川・札幌方面というのが概略のコースで、計6泊7日の行程である。

見学テーマは、源義経北行伝説、蝦夷三官寺の一つであった国泰寺、世界自然遺産である知床、人気の旭山動物園などである。引率は岩橋と伊藤先生。総勢30名、今回は男女比も均等であった。

○義経神社

日高平取（びらとり）に鎮座し、祭神は源義経である。幕吏にして探検家であった近藤重蔵が寛政十年（1798）頃に創建したと伝える。沙流川流域、平取周辺が義経北行伝説の中心地であり、わけても当社がその根幹となる。なかなか立派な社で、一度は訪れたい所である。

義経は平泉を脱出、蝦夷地に逃れ、やがて大陸に渡ってジンギスカンになったというのが北行伝説であるが、アイヌの人々を大いに教化した一方、彼らから文字を奪い去ったという挿話もあり、そこでは善悪両面を備えた人物像に設定されているのが面白い。

○国泰寺

蝦夷三官寺の一つとして徳川幕府により道東厚岸（あつけし）に創建された。正式には景雲山国泰禅寺、臨済宗である。立地の関係上、寺としての受け持ち範囲は道東から択捉島にまで及んだ。

国泰寺の住職は鎌倉五山から出すのが例で、建長寺派と円覚寺派との輪番制。極寒の地ゆえに住職候補者は逃げ腰であったことが記録されている。巧くいけば海産物売買等の副業で蓄財もできたが、着任後ほどなく病死してしまう不運な人もいた。ともあれ、鎌倉、あるいは神奈川にゆかりある寺として承知しておきたい。

また、国泰寺境内は桜の名所で、桜祭りが盛大に催される。ただし、樹種は花色の濃い蝦夷山桜であり、時期も5月末となる。当地名産の牡蠣を焼いていっぱい飲めば最高の気分である。

○世界自然遺産・知床

保護と観光のすみ分けが課題である。五湖入り口

の駐車場には大型バスが満杯で、大勢の人々が列をなして遊歩道を闊歩する。これでは熊も逃げ出すのではと思うほど。対策として、まずウッドデッキ（高架木道）利用を原則として、来年からは立ち入り制限、有料化、ネイチャーガイド引率の義務付けが予定されている。やむを得ない対応であろう。

一方、鹿が増え過ぎるのも問題となっており、町中に地域猫のように出現して花壇の植物なども食べてしまうとのこと。そうそう、あまり暑かったせいか、若鹿が湖で水浴しておりました。

○北海道の博物館

北海道の歴史がそうさせるのだが、道内博物館の展示内容は古代と近代開拓時代に限定され、一種の中抜け現象を呈している。とはいえ、なかでは斜里町立の知床博物館が小規模ながら、よくまとまっていたように思う。

○旭山動物園

旭川市立の動物園である。動物の生態を引き出した独自の見せ方が功を奏し、日本一の動物園として評価が高い。確かに多くの観覧者で賑わっていた。

ただ、素直に感想を申せば、子供遊園地風の色気が強く、動物園としての王道を歩んでいるとは思えない。真夏という時期のためか、動物達に少々生気が無いのも気になった。売店のグッズもいまひとつ魅力に乏しい。この運営手法のままでは何時か行き詰まるのではないか。

○カラオケ大会

最後の夜は旭川泊。恒例のカラオケ大会を挙行する。毎度のことながら、初めは皆々遠慮がちに、やがて次第に盛り上がる。歌に夢中で、カニやイクラをたっぷり入れた海鮮ちらしが随分残ってしまった。毎日のようにカニを食べたので、飽きてしまったのかもしれない。



平成22年度実習Ⅳ（海外）巡研報告

加藤 寛 ・ 星野 玲子

平成22年度、実習Ⅳ（海外）の巡検は中国江南地方を訪ねて中国美術及び清朝の文化財を実見した。日程は以下の通りである。

9月1日(水)

羽田空港→虹橋空港（上海）。

上海博物館及びバンド地域の見学。

2日(木)

豫園及び上海万国博覧会（中国館）の見学。

3日(金) 上海→揚州。

揚州博物館、漆器工場見学及び工芸館の見学。

4日(土) 揚州→南京。

大明寺、長江大橋渡河、中山文廟、南京博物館、城門を見学。

5日(日) 南京→杭州。

西湖遊覧、中国茶博物館、六和塔、杭州市内の見学。

6日(月) 杭州→紹興。

魯迅旧邸、会稽山蘭亭、紹興酒工場及び紹興旧市外の探索。

7日(火) 杭州

靈隠寺、杭州動物園の見学。

8日(水) 杭州空港→成田空港

今回の実習Ⅳ（海外）では、ふたつの美術館を訪問して「中国美術の至宝」を見学した。上海博物館では、北宋時代から明代の代表的な絵画・書跡や各時代の陶磁器及び漆器の展示を見学した。また、南京博物館では江南に伝わる中国美術と独特の様式を復元した磁器窯の展示を見学し、優れた美術作品を学習した。また、上海ではたまたま開催されていた万国博覧会場を訪れ、中国館内の歴史展示や3次元映像を駆使した人類創世のドラマに触れた。揚州では新市街地区の目覚ましい開発から中国経済の発展状況を目のあたりにした。とくに以前は非公開であった染

織や漆芸などの工場も新市街の一画に集めて巨大な団地を作り、工場内の見学および写真撮影などの調査も可能となった。訪れた漆器工場では、螺鈿・堆朱・漆絵・コロマンデルなどの装飾ごとに各棟に分け、最新の設備を駆使して生産し、製品は旧市街に新築した工芸館で展示販売をしていた。奈良唐招提寺鑑真和尚ゆかりの大明寺では復元された七重塔を中心とした寺院伽藍の巨大さに日本とは違った宗教観を感じた。また、毛沢東によって揚子江にかけられた長江大橋は中国国民の大事業として象徴的であった。

杭州では西湖の遊覧で優雅な清朝文化を堪能した。さらに紹興では南宋時代に作られた運河沿いに残る老街をめぐり、残されている18世紀の街並を見学した。とくに小説家魯迅の旧宅では内部を公開し、街並みとともに江南の家屋様式を理解することができた。また、書聖として知られる王羲之の「蘭亭序」が書かれた蘭亭では、竹林にかこまれた曲水に宴の様子をしのぶことができた。最終日には参加者全員で杭州動物園を訪れ、日本にはない「金魚館」やパンダ舎などを見学し研修を締めくくることができた。以上のように実習Ⅳでは中国南部の江南に残された南宋から清朝にかけての歴史・美術・文化財などから充実した中国体験ができたと考えている。



研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会では「歩くと歴史がみえてくる」をモットーに近世の江戸、近代以降の東京に関わる地域を対象とした巡検を中心に活動しています。

平成22年度は、3回の巡検を企画・実施しました。

第43回巡検では『江戸時代の漁師の島 一佃島・石川島一を歩く』と題した巡検を行いました。幕末から造船業に適した地域とされた石川島を出発し、江戸時代に漁業の栄えた佃島、開国後に外国人居留地が設けられた築地を歩きました。

第44回巡検では、江戸時代に臨濟宗聖福寺の住職を務めた名僧で、同時に多くの書画を残したことも知られる仙厓を取り挙げ、出光美術館の展示『仙厓一禅とユーモア』の見学を行いました。

第45回巡検では、『新撰組のふるさと日野』と題し、新撰組近藤勇、土方歳三、井上源三郎、沖田総司に剣術を教え、後に資金面で新撰組を支えた日野本陣を見学しました。その後、新撰組ふるさと資料館の展示を見学し、日野地域が歴史の中でどのような役割を果たしたかを学びました。また、日野出身である土方歳三の遺品を展示している土方歳三資料館、土方歳三の墓所である石田寺を訪れました。

今年度は部会員同士の都合が上手に取れず、予定よりも少ない活動数となりました。しかし、1・2年生の入部という進展を得られた年でもありました。

来年度は、部員の興味や関心を重視した活発な活動をしていきたいと思えます。



古典芸能研究部会

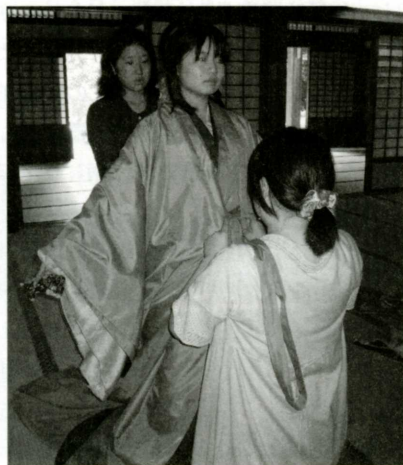
私たち古典芸能研究部会は、古典芸能など日本の伝統文化に直に触れる体験・鑑賞を通して学ぶことを目的としています。活動内容は、年に二回の夏の会・冬の会で伝統装束の着付けを学ぶ「装束体験」や雅楽師の指導の下に雅楽器を演奏する「雅楽体験」を中心としています。

今年の活動は、7月の夏の会に講師として東京成徳大学の青柳隆先生をお招きして、總持寺の紫雲臺にて「源氏物語の平安装束」をテーマとする「装束体験」を行いました。女房装束とも呼ばれる十二単・官束帯（武官束帯・文官束帯）・直衣・狩衣といった宮中に仕える人々の朝服の着付けを体験しました。

十二単は公家の女装束であり、下着である小袖・単衣を着付けた後、袷を重ねていきます。この時に、様々な色の袷を重ねることを「襲ねの色目」といい、季節や身分によって色の組み合わせが決まっていました。この上に打衣と表衣を着付け、最後に唐衣を羽織り、腰に裳をつけます。

官束帯では、大口袴に表袴に下襲、袖と半臂に袍を着付けます。官束帯には、武官・文官でいくつか違いがあり、その一つが袍の形状です。武官の袍を闕腋の袍、文官の袍を縫腋の袍といいます。また、石帯というベルトに飾り付けられている石の色・形で、身分を表していました。他にも、公家の平常服である直衣・狩衣の着付けも教わりました。

真夏日に絹の衣を9枚以上も重ね着したので、暑さと重さで動きにくく大変でした。このように衣の華やかさと、それ故の不便さなど「衣」を通して、公家の生活の一端を窺うことができました。



宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、発足から4年目になりました。今年度は新入部員はありませんでしたが、総勢26名という最多の部員数で活動をしています。

今年度は部員の意見を取り入れ、様々な計画をたて、活動をしてきました。まずは、毎年大船観音寺で行われている「キャンドルナイト」に参加させていただきました。キャンドルナイトは、広島原爆の残り火をキャンドルに灯して、世界平和を願うというものです。今年は天気にも恵まれキャンドルが消えることなく、多くの人々が訪れ、キャンドルの灯りが幻想的で厳かな夜を作り上げました。

他には、「大船ゆめ観音アジアフェスティバル」にも参加させて頂きました。「ゆめ観音」では、仏教圏の国々の方が集い、文化交流をするというものです。私たち研究部会は、受付や舞台記録という裏方の作業がメインでしたが、準備段階で様々な国々の方と交流をもてた事は、今後の活動の視野を広げる機会を得られたと思います。

来年度は、活動を通して部員一人ひとりが自らの課題を見つけ、取り組んでいけたらと思います。また、新入部員の獲得、巡検を企画するだけではなく、研究という分野にも活動を広げていきたいと考えています。今後とも、新設の研究部会ならではの(部員の意見を取り入れた多彩な)活動を繰り広げていければと考えています。

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会は、美術品や工芸品に対して、学生同士で意見交換をしたり、作られる工程を実際に見たりして、見聞を広げる部会である。

今年は、文化財や歴史について学ぶのが高校以来だという人と企画展に行く機会が多く、そこで一般的な展示の見方を実感することとなった。すなわち、展示場に入ってから順番にみて、細かい字の解説を読み、「分からないけどすごいのか」とか、理解できないけれど理解しなくてはいけない気分になり、最後の方ではヘトヘトになる見方である。美術品や工芸品を「見る」のも「観る」のも人それぞれだと思うが、「実際にみてどう感じたか」が最も大切だと思う。技法に驚くのも、かつての持ち主に思いを馳せるのも、これ欲しい!と思うのもいいと思う。そして、避けたいのが「だからどうなの?」と思う事である。「美しいものを

美しい」「(技術的に)すごいものをすごい」と理解するのは簡単である。では「美しい・すごいから価値があるのか」というと、そうとは限らない。これに対する答えは、おそらく他者との意見交換の中で、自分で見つけるものなのではないだろうか。自分ではできない見方に気付けるのは、複数人で同じものをみる醍醐味である。

美術や工芸に興味があるけど自分の見聞を広げられていないという方は、春季シンポジウムで代表に声をかけて下さい!!

研究部会は学会委員の活動と混同されがちだが、単純に「文化財関係のサークル」と思ってください!!



歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は、「鎌倉を拠点とし、関東全域に目を向けた活動を基本理念とし、古代から中世を中心に歴史についてあらゆる方面からの研究を目指し活動を行う」を意識しています。この活動理念を基盤とし、関東だけでなく部員の興味に合わせて、地域や時代に限定することなく、活動を行っています。とくに、巡検に力を入れた活動を行っています。

今年度は予定していた巡検に人が集まらなかったため、活動があまり出来ませんでした。来年度は今年度の反省点を生かして部員の数を増やし、部員の興味・関心のある事を重視した巡検の企画を立てて活発に活動していきたいと思っています。また、他の部会とも合同で企画を立てて活動を行ってきたいとも思っています。巡検の予定などは6号館地下の考古実習室前にあるホワイトボードに掲載しますので、興味がありましたらお気軽にご参加ください。

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 研究部会活動
 - 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。

付 平成11年10月16日から発足する。

付2 平成16年4月1日 一部改正

平成23年度の年間行事予定

文化財学会総会および春季講演会

日時 6月4日（土）

総会 午後1時から

講演会 午後3時から

会場 鶴見大学会館メインホール

テーマ 「富士山を世界文化遺産に 一富士山の文化的魅力(静岡県)」(仮)

講演者 松本稔章氏

文化財学会秋季シンポジウム

日時 11月5日（土）午後1時から

会場 鶴見大学メインホール

テーマ 「鎌倉のやぐらと石造文化財」(仮)

編集後記

文化財学会報Vol.12を刊行するにあたり、御助言・御助力を賜りました方々へ、この場を借りて感謝と御礼を申し上げます。この会報の活動報告を通じて、皆様に文化財学科の魅力をお伝えできれば幸いです。今後も文化財学科の発展のため、尽力していこうと思います。(椎木記)

学会委員となって一年が経ち、学会での仕事や編集作業も分からないことばかりでしたが、先生方や先輩方の指導のもと、どうにか刊行することが出来ました。皆様に少しでもこの文化財学会の様子をお伝えできれば良いと思っています。(伊藤記)

鶴見文化財学会報 vol.12 訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.12 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

- ・ P7 「研究部会報告 美術工芸研究部会」

誤：春季シンポジウム

正：春季講演会

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のまま掲載させていただきます。ご了承ください。